

「東日本大震災アーカイブの最前線と国境・世代を超えた挑戦」～東日本大震災アーカイブ国際合同シンポジウム～を開催しました(2012/1/11)

1月11日(水)、本センターが所属する東北大学防災科学研究拠点のほか、ハーバード大学、総務省、東北大学附属図書館の主催で「東日本大震災アーカイブの最前線と国境・世代を超えた挑戦」～東日本大震災アーカイブ国際合同シンポジウム～を仙台国際センター(仙台市)にて開催しました。3月11日に発生した東日本大震災の実態や、そこからの教訓を後世に伝えるために震災の記録をアーカイブしようとする試みとして、被災地内外・国内外・官学民で様々なプロジェクトが立ち上がっています。本国際合同シンポジウムは、これら主要なアーカイブプロジェクトが一堂に会し、それぞれの最新の取組み状況を発信するとともに、パネルディスカッションを通じて、東日本大震災アーカイブの像の方向性について議論を行うことを目的として開催されました。雪の降る中、約250名もの方々に参加していただきました。「東日本大震災アーカイブの最前線」と題して、東日本大震災アーカイブに関する主要なプロジェクトが官・民・学・被災地ごとに最新の状況が発表されたほか、「過去の日本の大震災にアーカイブを学ぶ」として、1995年阪神・淡路大震災で被災した神戸大学で震災文庫を立ち上げ、運営を行なってきた同大附属図書館の稲葉洋子氏より特別講演をいただきました。また、シンポジウムの最後には登壇者全員によるパネルディスカッションが行われ、収集・整理・保存、共有化、被災地の復興、今後の活動の継続、それぞれに関する課題や問題解決の提案に関する議論が活発に行われました。約7時間もの間、わずかな休憩しかないところ、参加者の皆様は熱心に発表に耳を傾けられていました。このシンポジウムは、岩手県遠野市で行われた「シンポジウム 東日本大震災の記録とその活用」の第2弾という位置付けもあります。登壇した機関は、今後も定期的に情報交換を行い、記録保存に、共通の枠組みを設けるなどして、連携を強化していきます。当センターからは、今村教授がパネルディスカッションのコーディネーターをつとめ、柴山助教が本学のアーカイブプロジェクト「みちのく震録伝」の報告を行いました。



シンポジウム会場の様子



パネルディスカッションの様子